

活動報告書

申請者氏名 Applicant's Name	今宿未悠	所属・学年 Affiliation/Academic year	政策・メディア研究科 2 年
活動名称 Title of activity	モンスーンの自然観/認知体系に基づく詩作方法の探究		
活動の目的 <p>本活動の目的は、モンスーンの自然観/認知体系に基づく詩作方法を探究することである。 科学が隆盛する現代においては、人間と自然とを分離し、自然を観察・支配の対象とする主客分離的な思想が一般的である。文化史学者である和辻哲郎の論[1]を参照すれば、この思想は元来西洋的なものである。しかしながら現在、西洋のみならず多くの人々の認知を基礎付けている[2]。 他方、東洋、特にモンスーン気候の地域においては長い間、別の自然観が採用されてきた。モンスーンの湿潤な気候は、動植物の生を悉く充滿させる。時には大雨、暴風、という巨大で圧倒的な暴力として現れる。こういった自然の前に人は、支配するなどとは考えず、ひたすら忍従的な態度を示してきた[1]。西洋の自然観が能動的に働きかけるものであるならば、モンスーンの自然観は受動的であると言える。 私は詩人である。詩作においては、徹底的に「待つ」ことが重要であると教えられる。創作活動は基本的に自らがゼロからイチを生み出す能動的なものであるとみなされがちであるが、詩作ではむしろ、世界に身をひらき、言葉が降りてくるのを「待つ」=受動的な態度が重要なのである。この「待つ」態度と、モンスーン気候の人々の自然観は、極めて親和性が高いと感じている。 モンスーン気候の国におけるフィールドワークを通じて、その自然観について深く知り、その自然観に基づいた詩作の方略を探りたい。これが、本活動の目的である。</p> <p>参考文献：[1]和辻哲郎. 風土:人間学的考察. 岩波書店. 2010. [2]中村雄二郎. 臨床の知とは何か. 岩波書店. 1992.</p>			
活動の内容 <p>モンスーン気候の顕著な国として、台湾が挙げられる。台湾は高温多湿で降水量が大変多く、集中豪雨のような特徴的な降雨形態に基づいて、多様な地形、地質景観が作り出されている。本活動では、2023年8月12日から30日にかけて台湾（台北）に赴き、大きく分けて二つの活動を行った。</p> <p>1、台湾在住のアーティストの作品制作に密着し、彼らの制作態度とモンスーン気候の関わりを探求する 台湾を訪れ、モンスーン気候の自然観に基づいて活動する現地の人々と行動を共にする過程で、彼らの認知体系を深く理解するフィールドワークを行った。具体的には、パフォーマンスアーティスト lololol が、8 月末の台北アートフェスティバルにて披露した新作パフォーマンス「玉山是一個處理器」の制作準備期間約 1 ヶ月に密着し、制作プロセスを観察した。</p> <div data-bbox="236 1391 1358 1787"></div> <p>2、台湾にて詩作し、のちに retrospective report を行うことで、台湾での認知体系の学びが詩作にどのような影響を与えたのか言語化する 先述した 1、のフィールドワークにて経験したことと並行して、台湾の地にて詩作を行った。さらに、詩作ののちに、内容について retrospective report を行った。retrospective report とは、ある主体の具体的な過去の経験について、当人に、当時の知覚対象や思考内容を問う質的研究法である。これによって、台湾での生活や学びがどのように詩作へと反映されたのか考察した。</p>			

活動の成果

活動を経て得られた成果は大きく分け3点ある。一つずつ列挙しつ記述する。

0、台湾の風土に対する身体的な理解

前項「活動の内容」にて述べたこと以前に、台湾で夏の2週間「生活したこと」がそもそも、一つの大きな収穫であったと考える。屋台には日本では考えられないほど大きく色鮮やかな果物が並びそれらは安価に売り買いされている。屋台には生々しい食べ物の匂いが湿気と混ざりあいながら充満している。道を歩けばゲリラ的に先祖を祀るパレードが行われる光景に出会う。それらの光景を形作るのは、台湾の多湿な、つまりは水と温度に恵まれた風土である。このことを身体レベルでまざまざと実感した。



1、風土が生活をつくり、生活が思想や作品をつくる

さらに、そういった光景を当たり前のもので受け入れている台湾の人々は、台湾で出会ったアーティストの言葉を借りればみな「chill」なのだった。台湾人は日本人のように、時間きっちり動くことに縛られていない。コミュニケーションはおおらかであり、**変化や想定外の事態に対して寛容である。その態度もおそらく、水と温度に恵まれ、豊かな自然が生い茂るからこそのものであろう。**そしてそういった態度に基づき、台湾のアーティスト lololol の作品の制作プロセスは、最初から全ての計画があるわけではなく、幾つもの小さな実験を行い、その結果に応じて作品の完成図が変化していくような極めて柔軟性に富んだものだった。起きたことを受け入れ、その結果を面白がり、完成図を更新していく。そういった態度が、lololol の作品制作に通底していた。

2、詩人としてのスランプに脱却の兆しを見た

実は台湾に行く直前、詩人である申請者はスランプに陥っていた。詩に向き合い出して3年間となる今年、活動の成果として、第一詩集を8月に出版した。その詩集を編集する中で自分の文体や作風を反復的に読み倒す中で、自分で自分の殻を作ってしまった、新しい作品を生み出そうとしてもどうしても過去の二番煎じのようになってしまっていた。

このスランプを抱えたまま訪れた台湾にて、申請者は、結果的に「**これはスランプを脱却したとってもいいのではないかと**」と思えるような詩を2篇残すことができた。なぜ、台湾へ飛んだことがスランプ脱却につながったのか。仮説として、台湾で生活をする中で「1、風土が〜」で記したような台湾の人々の態度が私にも染みつき、**自分自身外界に身を晒してそこから新たなものを引き込む力を取り戻せたからなのではないか**と考える。換言するならば、詩集編集を通じてできてしまった「自分の作風はこういうものである」という思い込みを取り払い、台湾にて出会ったものやことから純粋に詩性をとらえ、そこから詩を構成していく力を取り戻した。より具体的には、第一詩集において私は「身体の美しさ、液体の安らぎ」のようなものをテーマとすることが多かったのだが、台湾において書いた詩は「痛み、不快感、違和感、火」などがテーマとして上がってきた。詩を読んだある人からは「これまではずっと青かったのに、赤くなった」というコメントをもらった。この変化は台湾に行き、さまざまな人との関わりの中で自分を外に開くことができたからこそであると考えている。

今後の展望

今後も詩人として活動を続ける中で、スランプに陥ることはあるだろう。そういった時は、台湾での滞在経験を思い出し、自己を外に開くという態度を忘れずにありたい。

また、今回参照した和辻哲郎『風土』においては、気候の3分類として、モンスーン気候のほかに、砂漠気候、牧場気候を挙げている。これら**二つの気候に生きる人々にとって、外界はどのように捉えられ、創作に生かされるのか**について興味を湧いてきた。これらの気候が該当する国においてもフィールドワークを行い、気候と創作の関係について比較し、さらなる考察を深めたい。

最後に、本活動は SFC 学会の助成なしには成立しなかった。この場を借りて感謝申し上げたい。